

ヘブライ人への手紙に学ぶ

1996年1月から1998年10月

第10回 一人前のキリスト者の生活とは

第5章⑪節から6章⑧節まで 一人前のキリスト者の生活

5章⑪このことについては、話すことがたくさんあるのですが、あなたがたの耳が鈍くなっているので、容易に説明できません。

⑫実際、あなたがたは今ではもう教師となっているはずなのに、再びだれかに神の言葉の初歩を教えてもらわねばならず、また、固い食物の代わりに、乳を必要とする始末だからです。

⑬乳を飲んでいる者はだれでも、幼子ですから、義の言葉を理解できません。

⑭固い食物は、善悪を見分ける感覚を経験によって訓練された、一人前の大人のためのものです。

6章①②だから私たちは、死んだ行いの悔い改め、

神への信仰、種々の洗礼についての教え、手を置く儀式、死者の復活、永遠の審判などの基本的な教えを学び直すようなことはせず、キリストの教えの初歩を離れて、成熟を目指して進みましょう。

③神がお許しになるなら、そうすることにしましょう。

④一度光に照らされ、天からの賜物を味わい、聖霊にあずかるようになり、

⑤神のすばらしい言葉と来るべき世の力とを体験しながら、

⑥その後、墮落した者の場合には、再び悔い改めに立ち帰らせることはできません。神の子を自分の手で改めて十字架につけ、侮辱する者だからです。

⑦土地は、度々その上に降る雨を吸い込んで、

耕す人々に役立つ農作物をもたらすなら、神の祝福を受けます。

⑧しかし、茨やあざみを生えさせると、役に立たなくなり、やがて呪われ、ついには焼かれてしまいます。

「偉大な大祭司イエス」という大変大きなテーマを取り上げて、このヘブライ人への手紙は進められて来たわけですが、この前の第5章⑩節のところで一応中断して、その続きはずっと先の方に出てくることになります。

(混乱し墮落しつつあった教会に向かって)

この5章の⑪節からしばらくの間はこの小見出しに書いてありますように、「一人前のキリスト者の生活」への導き、もっと明瞭な言い方をすれば、「現在墮落しつつあるキリス

ト者への警告」をここに挿入しなければ、話が進められないような混乱した状況が教会の中にあったことを、私たちに教えている箇所だと捉えてもいいと思います。

6章の⑳節になって、また前のテーマが続いていきますので、この挿入部分は、丁度真ん中に入ってくることとなります。今度の新共同訳の聖書（1987年改訂版）ですと、6章の⑳節の最後の部分で「永遠にメルキゼデクと同じような大祭司となられたのです」と書かれていて、7章⑯節では「あなたこそ永遠に、メルキゼデクと同じような祭司である」ということで説明がなされているわけですから、今日は前半と後半の二つの「大祭司ないし祭司キリスト論」の間に挿入された部分を学んでいくこととなります。

教会という存在は、少なくとも、固定化された概念であったり、あるいは構造物であったり、建物であったりするのではなく、教会は生き働いています。ですから、状況によって様々な問題がそこには押し寄せ、それに対応することが求められて来ます。

何があっても、おじけることなく、おののくことなく、怯えることのない教会、そういう教会を私たちは絶えず祈り求めているわけですが、現実の歴史の中では、それは非常に困難な問題が多く生じます。ですから、地上にある教会は100%、（どこの教会もと言っていいと思いますが、）「闘う教会」であるわけです。

ですから、確固たる勝利の中に栄光を持った教会であるというより、むしろ、私たちの周りに起こってくる様々な問題と福音の故に戦い続けていく教会が、地上にある教会の姿であるだろうと思うのです。³⁰⁰

そうして、本当の勝利に輝く教会、「栄光の教会」は、天にあるイエス・キリストのもとに造られている「一つなる神の教会」であって、私たちはその教会に共に集う日を待ち望みながら、現実には「闘う教会」の日々を進めていると考えてよいだろうと思います。

このヘブライ人への手紙を受け取った教会の人々も同様に、この戦いの渦の中におかれていました。しかも、戦いの相手というのは、自分たちが歩んできた文化であり、歴史であり、また習慣であったわけです。事によっては、自分たちが今までこれらが大事だと捉えて考いた故に、神の前に自由を失っている姿、そういうものが、この手紙の著者の目には非常にはっきり見えていたのかもしれませんが。そんなことを感じ取りながら、この5章の⑪節からの御言葉を読み進みたいと思います。

第⑪節から⑭節

「このことについては、話すことがたくさんあるのですが、あなたがたの耳が鈍くなっているので、容易に説明できません。実際、あなたがたは今ではもう教師となっているはずなのに、再びだれかに神の言葉の初歩を教えてもらわねばならず、また、固い食物の代わりに、乳を必要とする始末だからです。乳を飲んでいる者はだれでも、幼子ですから、義の言葉を理解できません。固い食物は、善悪を見分ける感覚を経験によって訓練された、一人前の大人のためのものです」

この御言葉について少し目をとめて見ましょう。幾つかの問題がここには出て来ます。

中でも、「私がこれから極めて大事なこと、大祭司なるキリストについて語ろうとしているのに、どうも私の見たところでは、あなたがたの耳が鈍くなっていて、どんなに説明しても正しく受け止めて貰えないだろうと思うので、私はその筆を中断して、あなたがたに耳を開くための警告を送ります」。ということが書いてあるのです。

この「耳が鈍くなって」という言葉は、色々な意味があるだろうと思いますが、少なくとも、「あなたがたは何が語られても、自分たちにとっては、これはこうなんだ、というカテゴリを持ってすべてをその中に当てはめてしまい、そのことが持っている自由な面を完全に封じてしまっている。そういう受け止め方しかでず、そこで語られている相手の言葉を、生きた言葉として聞き取れなくなっていて、自分たちの持っているパターンに全部合わせてしまおうとしている」と言っているのです。³⁰¹

このことは最近の様々な医療問題、医学的な治療の問題が同様の大きな問題になって来ています。

少なくとも現代の医学と呼ばれるものは、たくさんのケースをデータ化したものを土台にして、こういう症状があればここが悪く、こういう治療をすればいいという形の医療活動を進めているのです。

言わば「パターン化」している。ですから、それとちょっとでもずれたことがあると、なるべくそれに近づけるように、どのパターンに合うかという観点から、医者や看護師の質問をして、近いものに合わせて治療を始めていくことをやります。そのために特別な病気がなかなか見つからなかったりするのは、風邪だと判断をする、風邪による下痢だと判断をする、というようなことから始まって

二次感染、三次感染などということが起こってしまったわけで、給食が問題だったと盛んに言われていますが、それ以上に医療ミスの方が現実的には大きかったわけです。

そういう「あるパターンに当てはめる」ことによって、この人はここが悪いから、こう治療すればいいという判断だけで行ってゆくことがある意味、一番楽なのです。それは自分が責任を負わないで済むからです。「O-157」の場合もそうでした。

丁度、私たちが学生だった頃、スチュワーデスの採用基準は、背は高からず低からず、体重はあまり重くなく、容姿端麗、眉目秀麗で、そして知的に優れている人であったわけです。ですから先ず、高からず低からずの基準の中に属していないと、それだけでパッと切り捨てられてしまうことが現実には起こったわけで、これが選別一つのパターンなわけです。³⁰²

つまり、神が私たちが愛してくださるならば、当然こうあるべきだという一つのパターンを持っていると、私たちの生活がそれにあてはまらない状態になるやいなや「神は私たちが愛していないのだ」という結論に達する。そういう安直な見方をする信仰の在り様も私

たちの社会ではしばしば見られるし、私たち自身の中でもしばしば起こって来る問題だろうと思います。

そういう私たちでは、語られている言葉を、自分の耳で正しく受け止めることができなくなり、ある種のものに擦り寄らせていこうとする形でしか聞き取ることができていない、ということを変面白いでここでは用いているのです。

「耳が鈍い」生き生きしていない、老化している、退化しているというのですが、神はあなたがたにそんな耳を与えられなかったはずだ。

すべてのものが生き生きと、あなたがたに与えられる恵みとして響かなければならないはずだ。なのに、あなたがたはそれを、「これは恵み」、「これは神の私たちへの刑罰」、「これは私たちへの対峙」というように分別し、恵みを自分で限定づけてしまっている現状はありはしないか。そういう中で、いくらイエスのことを語っても、あなたがたは自分の尺度で量るから、話が通じなくなると、ここでは言っているのです。

その次には、あなたがたはその耳が鈍くなった結果、もう教師になっていなければならない段階のはずなのに、まだ初心者でいる。別な言い方をすれば、ベテランであるはずなのにまだ若葉マークを付けている。いつまでたっても自分は初心者であると思い込み、初心者であることに甘んじ、そのことが自分自身を成長させていないことに気がついていない。³⁰³

最近の社会の流れの中でも、同じようなことが言われていますが、私どもが学生だった頃から少し後にかけて、大学受験に親がついて来ることが話題になったことがありました。入社試験にも親と一緒にいくのではないかと。言い換えれば、親離れできない子ども子離れできない親が問題になりました。

そうなりますと、暦の上では成人しても、何時まで経っても心では成人していない。知的にも社会的にも成人していない、そういう「ことな」が沢山になったと言われる時代がありました。今は逆に「子ギャル」なんていうのがいますが、私たちの時代には「ことな」というのが沢山いたわけです。体は大人になったが精神的には子ども。そういう「ことな」の状態が出て来たのです。

耳の鈍いあなたがたは、いつまでたっても子どもの状態でいて、お世話になり、誰かに面倒を見られることによって安心を得ている。つまり、自分の足で立ち、自分が責任を取ろうとしない。その時代に成人を迎え、社会に出ていった人たちが、今、ある意味では官僚社会の中心に立っていますから、責任を執ろうとしないのは当たり前なのです。

そういう中で、薬務局長（薬務局長、薬害エイズ事件では不起訴になった人）が逃げてしまって、控訴されたという事件が出て来るわけですが、別に彼は逃げようと思っているわけではないのです。自分がそういう役職だからやってしまっただけで、悪いのはそういう役職であって私ではないという考えを持っているわけです。³⁰⁴

責任が執れない人間、あるいは責任の執り方を知らない人間、もっと言えば一人前ではない人間、そういう人間たちがある程度日本の政治を動かしていますから、日本の政治はおかしな方向に進んでいる。まあ今度、衆議院の選挙が20日に行われますけれども、立候補している人が言っていることを聞いても、心打つものがあまりないのです。何が本当に大事なのか、私たちの国を良くするためには何をしなければならないのかが分かっていないで、今あるものを壊せばよくなるだろうという、非常に無責任な主張です。今あるものを壊し良くなる保障など、どこにもないのです。それでは今あるものが良いかという、良くないのです。（確かに！）

壊すのではなく、今あるものの中で何が間違っているのかをしっかりと見極め、それをきちんと摘出することをしない限り、日本の政治は変わりっこないのです。何が悪いのか見つかからないのです。それなのに、今あるものはとりあえず止めてしまい、別なものを作れば、少しは変わったものになって良くなるのではないか、新鮮味があるのではないかという安易な発想しか出てこないのです。

時間がある限り、私はテレビの政見放送を聞いているのです。栃木とか群馬とか千葉とか自分の投票地区ではないものも聞いているわけですが、そこで語られていることは、どの政党の政見放送を聴いても大して変わらないのです。

立候補した人たちが異口同音に言っているのは「今の政治は悪くなっていますから、私を変えます」と言うのです。「私が出て変えられる」ほど簡単に変わる日本の政治だと考えているところが実は問題で、それは丁度もう末期的な症状を迎えている患者さんの前に立って「今までのお医者さんは全部間違っていましたから、私が執刀すればうまくゆきます」と言っているのと同じなのです。

「じゃあ、あなたはどんな見識を持っているのですか」と政治家が問われたら殆ど何も出てこないのです。「私は日常、皆さんと一緒にいるから皆さんが何を考えているか良くわかります」と。皆がどんなこと考えているかわかるのは大事ですが、むしろ皆が考えていることをある方向に方向づけていくのが「政治を執る」ということなので、それこそが大事なことなのです。

どういう方向に方向づけるかを明確にしないで「皆様のご意見を聞きます」では、以下のような、大層ご利益があるという観音様にお参りした家主と泥棒の笑い話と同じですね。

「私はこれから旅に出ますから、どうぞ観音様、私の家に泥棒が入らないように無事に守ってください」とお祈りして大店の主人が旅に出た。そうしたら、その後に泥棒がやって来て「あそこの家に泥棒に入ろうと思うのですけれども、うまく入れますように」と言ってお願いをした。観音様はどっちを聞いたらどうという話がありますけれども、正にそういうような、他人がうまくやってくれるから、私も何とかそこでやっていけそうだと

う、自分自身の責任において事を成す人は殆どいない、そういう「自分自身の責任において、事ができない状態は、初歩の状態に留まっているからだ」というわけです。

教会で色々なことを言って話し合っている中で、「でも、私は先生に一度もそんなこと教えられたことはありません」とおっしゃる信者の方がいるのです。それもたびたび言うのです。しかし、私も私しで、すごく意地の悪い牧師ですから、その方にこう申し上げるのです。

「あなたは私を信じて信仰をお持ちになったのですか。それともイエス様を信じて信仰をお持ちになったのですか。イエス様を信じて信仰をお持ちになったならば、イエス様は、そう言っておられるのだから、先生から聞いたとか、聞かないとか、そんなけちなこと言わないでおやりなさいよ」と言うのですが、どうも相手は他人の責任にしたいわけです。

「うちの牧師がきちんと教育してくれないから、ちゃんと言ってくれないから、私たちの信仰はちっとも成長しない」と。本当にそうなのかなと思います。私の言っていることを聞いて信じたのだったら、私を信じているのであって、神を信じているわけではないのです。そうやって間違ふことは沢山あるだろうと思う。しかし、私たちが信仰を持っているということはイエス・キリストに聞いて、その御方を信じていることですから、その御方が私たちと共にいてくださ限り、イエス・キリストは昨日も今日も進みゆかれると書いてあ、共に前進しているはずなのです。後ずさりはしない、同じところにも留まらない、必ず前に向かって進んでいるはずなのです。

しかし著者も「ところがあなたがたは一步も前進していないではないか」と言うわけです。「信仰の初歩に留まっています。だから、まだあなたがたは固い食物ではなく、乳を必要としている。」と。言い換えれば、神が何を私に求めていらっしゃるかよりも、神は「あなたを愛していますよ」と言われることを好んでいる初歩の段階にある。神はそんな私たちに自立して、責任をもって隣人のために仕えなさいとおっしゃっているけれども『イエスは私のために死んでくださった』という信仰の出発点にいつまでも留まり続けている。それが有難いのだと言い続け、思い続けている」。何かこの辺を読んで来ますと、現実の私たちの姿をすごくはっきりと指摘されているように思われるのです。

イエスはそのようなことだけを求めている、もはや神はそのようなことを求めているのだ、もっと前進することを求めているのだ。それじゃあ、私たちが完全を求めるべきだからだろうか。このヘブライ人への手紙の中では「いや、あなたがたは完全でなくてもいいのだ」と言っているのです。そんな例が後になってから沢山出て来ます。

例えば「アブラハム」、神の言葉を聞いて出かけていったけれど、「完全ではなかった」のです、ある段階までは神を疑い続けるのです。

「約束したからといって、老人に子どもなんか増やせるはずがないじゃないか。空の星を見せてくれたって私なんか希望は持てないよ。広い砂地を見せてくれて、その砂の粒ほど

子どもが増えるなんて言ったって信じられないよ。でも、あなたが言うんだから聞いてはおきましょう。」という程度の信仰であったけれども、神が「行け」というところに彼は出ていった。その中で彼は養われ、培われ、成長していった。信仰はそういうものだ、ということはこの箇所指摘しようとしているわけです。同じところに留まり続けている信仰は、本当の意味で神を信じる信仰ではありませんと言うのです。³⁰⁸

もしもあなたがたが、お恵みをいただくことにだけに関心があるような”信仰”を持っているとすれば、それは赤ん坊ですから、神の義などについては…、言い換えるならば「大祭司が私たちのために執り成しをし続けていてくださる」などということについては、何もわからないでしょうし、理解できないでしょう、無理でしょう。

そんなあなたがたに本当に必要なのは、乳を離れて固い食物によって培われ、体力がつき、頑張れるようになることだと、そういうことをここで語っているわけです。

なかなか難しいことをここでは述べています。しかも私たちの現状をぐさっと刺すような言葉が沢山ここでは用いられているのです。私はここを読みながら、「私たちが神の前にいつまでもこんな状態にいるのは何故なのだろう」と考えてみるのです。すると、幾つかの点がここで指摘されているのに気がつきます。

マルチン・ルターは、「あなたがたが耳が鈍くなっている」という箇所を「あなたがたは無気力である。そして注意深く熱心に神の言葉を聞こうとしないで、自分サイドの物差しで、自分サイドの升で量って自分に適当なものだけを受け取っている」と書いています。

これは大変面白い言い方ですけれども、結局私たちは無気力で、自分の思い通りにやっている。言い換えれば、座り込んだまま、そこに来る恵みだけを自分のものにしようとしているという怠け者なのだ、とルターは言っているわけです。怠けていられる理由は、私たちが本当の飢え渴きを知らないからなのです。もしも、私たちが本当に飢え渴きを知っていれば、怠けてなどいられないはずです。

丁度、エジプトから脱出したイスラエルのように、本当にお腹がすいていたなら、朝起きて砂漠一面に広がっている「マナ」を見た時にじっとしているわけにはいかないのです。毎朝出かけて行ってそれを得るといふ熱心が自分の中に湧いてくる。そのような御言葉に対する飢え渴きがない、心が働かないのだと言われているです。

では「なぜ御言葉に対する飢え渴きがないのだろう。なぜ神に対する情熱を失ってしまったのだろう」。ユダヤ教では、その答えがある意味で非常に簡単なのです。ユダヤ教の律法主義と言われた思想の中に原因はあるのです。一方今日のキリスト教会では、それがある意味では「教条的信仰と言われている神学的な一つの知識の修得によって、すべてのものをえり分けていこうとする傾向の中にある」ことに原因があるのです。³¹⁰

ですから、生きた信仰ではなく、さっき言ったような「パターン化した信仰」があなたがたのものになっているからなのです。言い換えると、「今、神が私に何を求めているか」

を聞こうとしないで、神は私を役立つように造ったのだから、私はいつでも役立つようにできているのだとタカを括る。神は私を選んだのだから、私が生き、私が動いていさえするならば、神が選んだ責任において神は私をうまく取り扱ってくれる、だから、それでいいのだという他人任せの姿。正に「ことなの姿」、そんなものがイスラエルの中にあり、今日の教会の中にあるのです。

「今」神がこの私に何をせよとおっしゃているのかではなく、私は私の人生をトータルしてたとき皆、すべて神が生かしてくださっているのだから、それでOKなのだという考え方をする。そうやって来ると、熱心に聖書のお言葉など読むのが馬鹿馬鹿しくなって来るとです。神のお言葉はいつだって、私たちには幸い、他の人に向かっては裁きを告げている言葉なのだから、どこを読んだってそれは幸いなのだ。自分に都合の良い言葉を徹底的に暗唱して「これが私の生き方なのだ、これが私の信仰なのだ」と言ってしまわせるものが心の裡に出てくるのです。

著者は、そういう怠け心、一所懸命聞こうとしない心、そんなものがあなたがたを成長させていないのだと言うのです。そのことから起こる無知があなたがたの中に”ある”、知識のないことに気づかない。果ては、成長率0%の状態じゃないか、ということをごここでは問題にしているのです。

私たちは自己中心的な生き方を、割合い平気でしています。私の信仰のつまずき、不成長が、私を召してくださった神の教会の不成長につながっている、私自身がどう生きるかがこの教会がどうなるかを決めて行く、という意識がない、個人主義なのです。

私という人間が神によって、たまたまこの教会に導かれ、この教会で救われ、それだから今も何となくこの教会に属しています。確かに一面の真理です。しかし、「ウルスの地から出て行きなさいと命じたのは神なのです」。なぜ命じられたのか。あなたの行く先で、あなたを通して、あなたに触れる人々が神の祝福を得るためです」

言い換えれば、神の恵みを共に生きるために、私たちはこの教会に遣わされ、この教会に生かされ、この教会の一員とされているという意識が欠落している。だから、自分が成長しなくても構わない、周りも同じではないか、それでよいではないかとそれ以上のことは考えない。

確かに、パウロのように「私の不真実が全被造物に今、滅びを来らしめているのだと感じて悔い改め、神の御心に生きる者になろうと願い求めてゆくことが大事です」と、教会が語っていない一面があるのかも知れません。

今日の科学者や評論家の言うように、「自然破壊」は人間の傲慢さや、合理優先性や大きな資本をもった人々が楽に暮らせるようになるために行われた結果であって、「あの破壊破壊した奴らが環境破壊をなし、人間が住みにくい世界を造り、すべての被造物が生きにくい状況を作り上げたので、元凶は彼らだ」と言ってしまおう。合理的な社会の中では、ある程度はそれで納得はできるのです。³¹²

ところが、聖書は合理的な書物ではないから、そうは言わないのです。

「こんな状況になっている原因は、あなたの不真実、不誠実、不信仰にあるのだ」と言っているのです。だが、そういう言葉はあまり聴きたくありませんから、蓋をして、「神は私を救ってくださる御方なのだ、その御方によって私はすでに救われているので、もう感謝なのです。それ以上、私は何を望むことができるでしょうか」と言っている状態ではありませんか。これでは全然進歩しないのです。

そういうところに、あなたがたの信仰は留まり続けていませんか、というのがこの部分で語られていることなのです。そうだとすると、これは聖書が私たちに語っている真理からはものすごくかけ離れ、真の信仰から外れたところで、「自分のために神を信じている」という姿が如実に示されて来てしまっているのではないかなと思うのです。

そういうことから起こって来る色々な混乱、混迷、そのようなものが私たちの周りには蓄積されてしまっています。私たちは自分たちの無知、怠惰を何とかして取り繕っていきましょうから、それに都合のよい理論を蓄積するのです。教義とか教理とか色々な言葉を使って、神とはこういうもの、イエスとはこういうもの、世界はこういう風になっている、人間とはこういう存在、などというものをたくさん作り上げ、私はそれらすべてを知っている、だから私の信仰は間違っていないと考える。

それでは「命」がないのです。そこには生きて働く自由さがありません。固定化され、形式化されてガチガチになっているのです。例えば、私たちの国の憲法がそうです。作られた時には確かに「命」があった。「願い」があった、「祈り」があった。そして、「責任をもって自分がそれを担っていきましょう」と国民が皆考えた。ところが50年の歴史が過ぎると憲法は形骸化してしまい、自分たちの生活に都合の悪い部分は、都合のよくなるように解釈し直して、「これは憲法に違反していない」と言い張るのです。

これは、ひどい言葉だと私は思うのです。私たちは「これは憲法が望んでいることだ」と考えて行動しなければいけないのに、憲法を柵の上に祭っておいて、「あれに違反していないから大丈夫だ」と判断するようになってしまった。憲法が私たちを縛るのではなく、私たちが憲法を縛って生きている、そういう日本にいつかしかかっているのです。

それが今日の日本が国際社会における不信感を受けている理由なのです。「カッコいいようなことは言っているけれども、やりたい時はその憲法を自分たちに都合の良いものに変質させて、平気で生きて行く国など信頼できない」という危機意識が周辺の国々から私たちに向けられている。だから政治の舵取りをしている人たちはなるべく周りの国を見ないように「アメリカとの経済摩擦」とか「EUとの何とか」とか等、日本に批判的でないような国の問題に目を向けさせるのです。

「今、国民が一体となってこの国を守らなければならない時なのだ」などという話を聞くと、私は60年位歴史が戻ったのかなと思います。「今、私たちの国は世界中から抑圧を受けて自由さを失っているので、国民は打って一丸となってその力をはねはね除かねばなりません」と言って始めたのが、あの「太平洋戦争」なのです。なのに、またぞろ同じことを言っているのです。³¹⁴

本来、憲法の精神はそんなことは言っていないのです。「周りの国がどんなに私たちを抑圧しようとも、周りの国々を信頼して、平和によって他の国との関係を構築してゆきます。抑えつけられても、はね除けられても仕える者として世界の国々に貢献してゆきます」と日本国憲法にはそう書いてあるのです。

ところが、このままでは日本の国の立場が悪くなるから、何とかして闘わなければいけない。「ノーと言える国にならなければならない」とか、色々なこと言っているわけです。私たちはこういう問題を現実と考えていく時に「形骸化させる」ということがどんなに怖いことか、私たちの生活の中でも実感していると思うのです。

「それは信仰においても同じだ」とヘブライ人への手紙の著者は言っています。あなたがたの信仰は形骸化してはいませんか、信条的なもので自己満足はしていませんか。だから、あなたがたは良いものと悪いものが見分けられないのです。ある意味ですごく興味深いと思うことは、「良いもの」というのをどう考えたらよいのかということです。³¹⁵

この前もある集会でこんな話をしたのですけれども、「良いものを求める、良いものを与えるという時の『良い』という基準は多くの場合自分にあるのです。私たちの判断の中でこれは良いと考えるものは良いのだとってしまう。」

(イエスが“良いこと”と考えられたこと)

ところが、主イエスが3年間の公生涯を歩まれた中で、良いとお考えになったのは何だったかという「相手がそのことによって生きる」。それが良いことなのです。自分がそこにいることによって相手が生き、喜び、感謝し、希望が持てたら、それが良いことなのだ、私がそこでは見捨てられても、踏みつけられても、排除されても、相手がそのことによって生きられたら、それが良いことなのだと言っているのです。

だから、このヘブライ人への手紙の著者も「教会が成長するのは、教会の規模が大きくなることであるという考えではない」と言っているのです。教会の働きが周りにいる人たちを生かす働きになった時に、そういうパワーが働いた時に、教会は良くなった、大きくなったと言えると思うのです。

教会が数を増し、立派な建物を建てたから教会が良くなったとは考えていないのです。私たちはそういう意味では質的に良い教会を造らなければなりません。そして、多くの人たちがそのことによって喜び、感謝すれば必然的に、あのペンテコステの日のように三千人もの人々がそこで洗礼を受ける状況が起こって来るのです。

「あれは使徒たちが良いことをしたからではなく、聖霊によって語らしめられた言葉が真っ直ぐに相手の心に働きかけて、その人が喜びを感じ、感謝し、生命を感じたから彼らは洗礼を受けたのです。³¹⁷

「教会はどうしたら洗礼を受ける人を増やせるか」という、技術的なノウハウばかりを考えて、「相手を心の底から揺り動かす程の喜びを与えることを忘れてはいないか」というのがここに書いてある文章ではないかと思います。

あるいは、今までこれをやって来たけれども時代は動き、変わったから、同じことを繰り返してもしょうがない、もう少し効率のよい伝道をしなければいけないのだ、というようなことを考え始め、相模原の地域の諸教会が協力し合って「相模原牧師会」というものを作り、「間もなく58万人になる市民全体にどうやったら本当の福音の中で生きることを教えられるだろうか」という話し合いのシンポジウムを持ったのです。

その時に色々な教会から集まった信者さんが10幾つかのグループに分かれて、それぞれ自分たちの考えを述べたのですけれども、奇しくもと言いましょか、大変不思議なことと言いましょか、6つ程のグループで共通に出たのが、「教会の恵みの情報を、インターネットで見られるようにする。そうすると沢山の市民がそれに触れることができるようになるだろう。これは素晴らしい」ということです。

インターネットで福音が人々の心を捉えることができるようになる、勿論、神が用いてくださればそういうことも可能でしょう。

イエスの時代にもある意味では一人対一人でない、大勢の人たちに伝道する伝道の仕方はたくさんあったのです、ところが、イエスはわざわざ一人のところに出かけて行って伝道したのです。何故でしょう？³¹⁸

それは、信仰というのは人格的な出来事だからなのです。人と人々が隣人として付き合う時に生まれて来る「一つの新しい出会い」なのです。

勿論、そういうことの素地作りにインターネットを使うことは少しも悪いことだとは思いませんが、そうしたら一度にたくさんの方が救えるというのであれば「あなたもそうやって救われたのですか」と発言した人に聞き返したくなるような事柄です。

実際には、私が発言すると大変なことになるので言わなかったのですけれども、自分が救われる時には「イエスが他の人ではなく、この自分を愛してくださって…」と言うのですが、何かこう、その恵みを伝える時になると、一般大衆は皆一度に救われれば効果がよいと思ってしまう、自己の尊厳さと、他者の尊厳さというものには、これ程の開きがありません。

「私は一生かけてでもこの御言葉を伝え、救いの喜びを伝えてゆきたいけれども、私にはできない、神が働いてくださらなければ。」という謙虚さがなく、救いは自明の事

柄だから、そういうことをパソコンでパッと見せて、「あなたも救われているよ」と呼びかけてやることはとても大事なことなのですが、それは「いいことなのです」で終わってしまう、と私は懸念するのです。

「聖霊が働かなければ何事も起こらないという謙慮さ、それが欠落している」
別な言い方をすれば、「その人の信仰の中で、聖霊の力によって今日生きているという信仰が欠落している」ことをその時強く感じたのです。これは大変難しい問題です。

一所懸命に一人でも多くの人を救いに導きたいと願うと、どうしても大勢の人に網打てば、その網にたくさんの人がかかってくると考えるのは悪いことではないのですが、でもそれが神の聖霊によってゆるしていただけるならばとか、神がそれを受け入れてくださるならばという、神への求め、神のお働きへの完全な委嘱というものがなかったなら、どんなによい方法を考えついても、決して救いは起こって来ないのではないかと思います。この私だって救われなかつたらろうということを考えるのです。

第6章①節、②節

「だから私たちは、死んだ行いの悔い改め、神への信仰、種々の洗礼についての教え、手を置く儀式、死者の復活、永遠の審判などの基本的な教えを学び直すようなことはせず、キリストの教えの初歩を離れて、成熟を目指して進みましょう」

そういう、「私たちのこの世の知恵や、私たちの慣習や、私たちの経験の産物を一切まとめて、『死んだ行い』と呼んでいます」。

「死んだ行い」というのは別に役に立たなくなったとか、時代遅れになったという意味ではなく、「命」を欠落させた行い、聖霊を無視してしまった行為、私たちの知恵や力や経験に頼った行為、この手紙が書かれた時代でいえば、律法であり、慣習であり、教会の儀式であり、そういったものが「死んだ行い」であると言っているのです。

ここを押せばこうなるといったマニュアル化されてしまったものが、ある意味では「死んだ行い」であるわけです。³²⁰

本当に大事なものとして、「あなたがたも知っているように」と言って、

「使徒の教え=ディダケー」と呼ばれているものの中に出て来る事柄を幾つか取り上げるのです。ここには6つ出て来ます。

第一は「死んだ行いの悔い改め」コンバージョンです。それから「神への信仰」。すごくこれは大事です。単に、あなたの信仰とか私たちの信仰ではないのです。

「神への信仰」、あなたの信仰は何に拠っているのですか。何に向けて信仰は働いているのですかとここでは問われているのです。

別な言い方をすれば、イエス・キリストにあなたのすべてがかかっていると信じて、今を生きていますか？ あなたが語り、生きてることがキリスト・イエスなしにはできない

ことなのですか？ と問われています。キリスト・イエスなしにはできないことによって、私たちのすべてが貫かれること、それがここで言う「神への信仰」なのです。

第二は「種々のバプテスマについての教え」です。

これはご承知のように、この時代はユダヤ教からキリスト教への立ち返りをあらわすバプテスマの他に、自分たちが神の前に犯した罪の一つの贖罪の仕方としてのバプテスマがありました。あるいは、自分たちの義を主張するためのバプテスマがオリエント宗教の中にあつたのです。いろいろなバプテスマがあるけれども、「本当に私たちが受けなければならないバプテスマは、『イエス・キリストの名による聖霊のバプテスマ』なのだ」ということをきちんと知っているかどうかなのです。

洗礼の儀式が大事なのではなく、そこに聖霊が働いて、あなたを新しくしてくださるという経験、古いあなたが本当にそこで死んでいるかどうかという問題、それがこのバプテスマの中では問われているということをきちんと覚えなさいということです。

第三には「手を置く儀式=按手」です。

「本来教会のバプテスマは、今はこの按手ということと平行して行われています」。
洗礼を受けた者、それは牧師が手を置いて信仰生活に入ったことを承認していく、あるいは、信仰生活が全うされるように祈っていく、ということをするわけですから、このバプテスマは平行して行われていますけれど、当時の教会では洗礼を受けることの他に按手することが守られていたのです。カトリック教会では今でも洗礼と按手はそれぞれ礼典として別にあります。

洗礼とは私どもの教会で言うなら求道の決意をすることであって、按手を受けることは洗礼を受けることと同じように、今、カトリック教会では位置づけられていますけれども、そういう洗礼と按手がここでは問題になっています。³²¹

第四には、「死者の復活」です。

死者の復活の信仰は旧約の中にもあります。イザヤ書（26章）の中にも、あるいはダニエル書（12章）の中にも出て来るのです。勿論、イエス御自身がマルコによる福音書（12章）の中で死者の復活について語られています。あるいは、パウロがコリントの信徒への手紙一の第15章で復活の問題を取り上げていますが、教会の大事な一つの問題が死者の復活だったのです。

つまり、私たちの人生は地上で終わるのではないこと、神は死んだ者をよみがえらせ、生ける者はそのままの姿で神の御前でもう一度裁きの座に立たしめられるという、その後にある永遠の審判ということと結びついてゆくわけです。が、そのような事柄はきちんと定着していなければならないはずで、それは既にあなたがたがマスターしているはずのことと言うのです。

ですから本来、もう一度、そのことについて教育を受け直したり、注意されたりするような必要はないでしょう。それは初歩的な問題ではありますから。あなたがたが、がたがたしたり、右往左往したりしているとはどういうことなのですか、と。

それで、最初に言ったことを多少具体的に6章のところで語っているのです。この辺のところもディダケーという使徒の教えの中に「こういうことが教会では信じるべきことですよ」と、きちんと書かれていますから、その初歩的な事柄を、あなたがたはきちんと知っているはずですよ。別な言い方をすれば、「そのことに根ざして、あなたがたの今日があるはずですよ」と言っています。

ところが、私たちはその初歩のところで信仰が完結したかのように、これが分かり、これを信じ、このように生きていくことが立派なクリスチャンだと思っています。が、そうではなく、そのことを土台にして、自由が得られ、新たに生きることが始まるのが本当のクリスチャンの生き方なのですよ、その先の③節以下で言うわけです。

(荒野に立ち帰る)

第③節、「神がお許しになるなら、そうすることにしましょう」

「私たちが聖書を毎日読む。それは勿論、旧約の時代によく言われたように、『荒野に帰れ』という、あの荒野に立ち帰ることです。しかし、荒野に立ち帰ることとは初歩に戻るのではなく、荒野において導かれた神の恵みを信じ、共有し、そこから今日を生きることと結びついて行かねばなりません」。

言い換えると、そのことのゆえに、今日を自由に生きられる。今日を神が与えてくださった「恵みの時」と信じて立ち上がることが、荒野に帰ることなのです。ところが「荒野に帰れというから荒野に帰って、もう一度祈つつ、神の言葉を待っています、というような考え方をしたのでは意味がない」と、ここでは言われているわけです。

(第五は、一度ということ)

第④節、「一度光に照らされ、天からの賜物を味わい、聖霊にあずかるようになり」

この「一度」という言葉は、物すごく大事な言葉なのです。この「一度」という言葉は新約聖書の中ではおよそ15回程使われています。そのうちの8回がこのヘブライ人への手紙で使われています。そういう「一度」なのです。

別な言い方をすると、この「一度」というのは決定的な一回、丁度私たちが誕生したという「一度」なのです。もう元へは戻れないのです。母の胎を出たという、その「一度」は決定的な一回であって、しかも私たちの全生涯を通して一回しか起こりえない、かつ逆戻りができない一回なのです。

「一度神の光に照らされる」、「一度天からの賜物を味わう」、「一度神の聖霊にあずかる」、ということは、そこで全く新しい事態が展開される、後戻りできない状況の中で私

たちが生き始めたことなのです。信仰とはそういうことなのです。悔い改めとはそういうことなのです。

ところが、どういうわけか、決定的であったはずの「一度」が一度でなくなって、「もう一度母の胎に戻ることですか、と聞くような愚かさをしているではありませんか。」そういうことを、私たちはこの言葉の中から味わうことができると思います。

第⑤節、⑥節「神のすばらしい言葉と来るべき世の力とを体験しながら、その後に墮落した者の場合には、再び悔い改めに立ち返らせることはできません。神の子を自分の手で改めて十字架につけ、侮辱する者だからです」³²⁴

これは、「一度キリスト者として誕生した人間は、二度この世に生まれ直すことはできない、だから一度生まれたことが間違いだった、失敗だったと気がついたら、あなたの生涯は永遠に間違いであり、失敗でしかないのです、やり直しがきかないのです」ということなのです。

「これはすごい言葉だと思いませんか。一度救われたことが確固たるものとして打ち建てられたとするならば、それはあなたがたの一生を支配するものです。もしあれは間違いだったのだと感じたとすれば、あなたがたの一生は間違いでしかないのです」と言っているのです。こういう厳しさ、激しさを、「私たちは新約聖書の中に生きていますから、余り感じないのです」

「旧約聖書の中で生きた、当時の信仰をもったヘブライ人たちはこのところが良く分かるのです」。「神との『一回の契約』は差し替えが効かないのです」

例えばロトの妻を見てごらん。救ってやると神はおっしゃった、その代わり代替条件として「後ろを振り返らない」ということを求めた。その契約に従って彼女は救われるが、「後ろを振り返り向いた」ために彼女は塩の柱になってしまった。振り返りはできないのだ、やり直しはきかないのだ、決めて出発したら、もうその道にしか進めないのだ。

この例示はすごく面白いですがけれどもね、だからこそ「自由だ」と言うのです。ヘブライ人への手紙ではやり直しがきかない、だから神の言われた通りにすればよいという中で、私たちは生きています。そして、それは日々、神によって新しくされることによって造り変えられて生きていて、昨日のあなたは問われない。あなたが前に進む限り、後ろに残して来た足跡を神はご存じだ、けれども、そのことのゆえに、神はあなたを追求はしない。だから、前に向かって進むことが唯一つの救われる道であるし、そして前に進むことをし続ける限り、神はあなたを恵むと約束してくださったから「自由」ではないか、という、その「自由」なのです。

今が楽しいから自由なのではないのです。

それで、聖書の神は、「わたしの言葉に従って歩み続けているならば、その前がどんなであろうと、わたしはそのすべてを知っているけれど不問に付しましょう。」今、あなたが忠実に神の言葉に従って生きているならば、起訴されるよりは今日を生きただけがいいわけ

です。投獄されるよりは現実の中で、歴史の中に私たちの歩みを綴った方がいいわけです。だから、あなたがたは拘束され、投獄されなければならないところから解放されているという意味において「自由」なのです。

キリストの言葉に従って生き続け、一度救われたら決定的なものだから、それに従い続けている限りでは、私たちのもっている罪責の責任は問われないということが「贖い」という言葉の中にはあります。従って、贖いは、契約によって私たちのものになるのです。そうすることで（利己的、打算的に聞こえるかもしれないけれども）契約というのは「信じること」です。神だけを自分の生きる拠り所「よすが」として信じること、神の言葉だけに全ての存在を託して生き続けること、それが信じることなのです。³²⁶

そのことによって、あなたの過去は不問に付される。あらゆる罪責から自由にされることがここでは述べられています。「だから、自分がもう一度過去に戻って、そのことの利得で生きようとするなら、あなたがたの自由はなくなります、もう二度と悔い改めることはできなくなりますよ」と言っているわけです。そしてその結果、「あなたがたは神の子をもう一度、十字架につけることになるのです」と、正にそのことを言っているわけです。

第⑦節、「土地は、度々その上に降る雨を吸い込んで、耕す人々に役立つ農作物をもたらすなら、神の祝福を受けます。しかし、茨やあざみを生えさせると、役に立たなくなりやがて呪われ、ついには焼かれてしまいます」

最後に六番目に「土地」というものを取り上げます。

地面はそれだけでは真に価値がなく、意味もないものだが、神はこの地面に命じて、すべての植物を生えさせ、育ませることをお命じになった。地面がそのことを一生懸命し続けている限り、神は雨を与えてそれを助け、日を照らさせてそれを成長させ、神の豊かな憐れみによってこれを支えてくださり、土地が成長させたのだと認めてくださる。しかし、雨を受けても無駄に流し、日を受けても豊かな命をそこに育まないならば、その土地は荒地になって捨てられます。³²⁷

神がお召しになり、神がお与えになり、神が支えてくださっている何の変哲もない地面でも、神の恵みを受け入れて生きようとするならば、(応えて生きようとするならば)いよいよ豊かに神に感謝でき、祝福を与えられますが、御言葉に応えようとしないならば、荒地のままで捨てられてしまいますと書いてあります。

恵みに応えて生きることが、神の祝福を受けるために不可欠な条件です。土地に植物を成長させる十分な力があるのではなく、神が恵みとして雨を与え、日を照らしてくださることによって成長します。土地がしたように神はその恵を、あなたのものとしてくださいます。それが祝福なのです。

私にできたから、私が一人でやったのではないです。隣りの荒れ地になっている地面と私の地面とは全く同じ地面なのです。なぜ差ができたかという、神がくださった恵みに応えたか応えなかったかだけなのです。神が与えてくださった使命に応えたかどうかだけなのです、とここでは語るわけです。

あなたがたは「恵んでください、恵んでください」と言いながら生きているけれども、応えようとしていない限りは荒れ地になりますよ、いくら雨を降らせても、それを受けて他の者に与え、育もうという気持を持たなければ、その恵みの雨は表面を流れてやがて消え失せてしまいます。何も成長させられないのですと言っているのです。

私たちの信仰の実が実らないとすれば、それは神の恵みに応えようとしていないからなのです。自分のために恵みを求めているからだ、と言えるかもしれません。今日の部分ではそんなことが書かれているわけで、中々大変な問題だと思うのです。³²⁸

最後に一つだけ付け加えておきますと、「信じてから信仰を離れて行く人々が、今ここに出てくるわけですが、私たち自体は信じて離れて行こうなどと少しも思わないのです。けれども、私たちが私たちなりに歩みを展開すると、どこかでキリストなしにでも生きていけると感じるようになる、そういう誘惑、あるいは、神への反逆を促すこの世の力が私たちを取り巻いています。だから、四六時中神の語る言葉に緊張して、自分自身の全霊をそれに注ぎ込んで、聴いて応えて行かねばならないのです。それを怠けると墮落しますと言っているのです」。

それが、今日の箇所です。私たちに与えられた警告なのだと思うのです。

この言葉が真実であるかどうか、私たち一人一人が体験してみなければ分からないことでしょう。著者は旧約の先達を挙げて、これは確かだよと後で説明しますけれども。

しかし、私が「間違いない」とも断言できるとすれば、それは私自身が神に応答せんと無我夢中の中で生きていった人生を振り返りの時でしかないでしょう。

「御言葉を聴いて行わなければ、私たちの信仰は価値のない、値打ちのないものになりますよ」というあたりは、その通りですと言えるところが沢山あるのですけれども、「神に従って生きれば、豊かな実を結ぶ」というあたりについては、即、アーメンと言えない部分があり、まだそこまでいっていない状態ですから、恵みにあずかって信仰の教師になる「ベテラン」になるような歩みをしなさいと著者は言っています。この勧めを、私たちへの勧めとしても聴いておきたいと思います。1996年10月12日

写者あとがき

私は「基本的な教えを学び直すことはせず、キリストの教えの初歩を離れて、成熟を目指して進みましょう」という歳になっていた頃、聖書を離れ、礼拝をおろそかにしてきました。そして離れること、おろそかにすることが強くなればなるほどに、このヘブライ人への手紙第5章から6章にかけてのみ言葉が強くなり襲いかかって、恐怖を感じ、布団をかぶって一時の恐怖を逃れる子供のように、必死で布団被って逃れていました。

「一度光に照らされ、天からの賜物を味わい、聖霊にあずかるようになり、神のすばらしい言葉と来るべき世の力を体験しながら、その後に墮落した者の場合には、再び悔い改に立ち帰ることはできません。神の子を自分の手で改めて十字架につけ、侮辱する者だからです。」(6章④～⑥)

日常生活ではどんな闘いの中にあっても危機一髪の所で助けられ豊かな恵みをいただき、その場その時では感謝していましたが、内面の真実な自己においては罪責感が強化される一方でした。この世の目に見えるものの整理は模範生のようにつけていましたが、「自分の義」にとりつかれ「神の義」を忘れていました。いつかの時点で信仰の立て直しをしなければならぬと思いつつ長い月日が過ぎ80歳の誕生日を迎えました。

そして豊かな憐れみとお恵みを頂いて導かれこの「ヘブライ人への手紙に学ぶ」に直面させていただきました。

今回の10回に至るまでは、ただひたすら写書する、出来るだけ間違いなく写書することに専念してきました。未だに間違いはなくせませんが、確実に体に染み込む実感が湧いてきました。

それは、松山幸生先生から教わったことの実が点から線になり始めたこと。更に、松山幸生先生が講解される聖書の深い意味を森容子先生の毎月の丁寧なご指導によって理解できるようになったこと。加えて、3月から礼拝と聖書研究・祈祷会にあずかることによって聖霊の働きを実感しつつあるということです。

礼拝の与り方については恩師から教わっていましたが実行しませんでした。聖霊の働きもあることは教わっていましたが、それは結果的な恵みを通して感じられ感謝していました。今ここでの実感は数えることができるほど少ないことでした。

今、「ヘブライ人への手紙に学ぶ」を写書させて頂き、主の深い憐れみと豊かな恵を賜り、希望を持って学ぶことができるようになりました。

「わたしの言葉に従って歩み続けているならば、その前がどんなであろうと、わたしはそのすべてを知っているけれど不問に付しましょう。」今、あなたが忠実に神の言葉に従って生きているならば、起訴されるよりは今日を生きた方がいいわけです。投獄されるよりは現実の中で、歴史の中に私たちの歩みを綴った方がいいわけです。だから、あなたがたは拘束され、投獄されなければならないところから解放されているという意味において「自由」なのです。

これらのことも初歩的なことではありますが、私にとっては大いなる成熟への一歩です。今年を受難節から復活祭にかけて「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」を黙想しました。

「ヘブライ人への手紙に学ぶ」では第9回でした。諸先生方のご指導の賜物でございます。感謝でございます。

第9回の「写者あとがき」が書けなかったことを今ここで懺悔告白し、信仰の立て直しに向かって前進する喜び、安息日を待ち望む日々であることを記します。